

Title	Japan, a short cultural history, by G. B. Sansom, London, 1931
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1933
Jtitle	史学 Vol.11, No.4 (1933. 2) ,p.180(686)- 181(687)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19330200-0180

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

の文藝作品とも云ふべきであらう。又他面彼の主著「羅馬法王史」、「ドイツ史」、「フランス史」、「英國史」、「世界史」を解説せられて、分析と総合とを施され、各書の内容、成立經過を明にする。同時に、全體を統一的に見てランケの歴史に對する態度が遂に「世界史」の大成を見るに至る心的、技術的過程を的確に敘述せられてゐる。本書に引用せられてゐるランケの言葉「歴史は藝術であり、同時に學問でもある」を自ら體現せられたものとも云へやう。而して尙本書の傾向を個人中心とするのは、史家の思想を時代との關聯に於て把握する際、これを前後の時代との關聯に於てせず、たゞ部分的にのみ説いて全體的統一を缺くからである。更に又文獻史料批判法の發展、更に進んでは補助科學を採用してこれを修史の基礎とし、遂に近代史學の面目を樹立するに至る経路も決してこれを無視されたのではない、即ち前記の「古代史研究の發展につきて」に於て、全篇のプランを窺へば明であらう。しかしこれを全體的の背景とし、この基礎の上に立つて各個の史家を把握するに至らなかつたのは幾分遺憾な點である。この點を強調せられたなら歴史專攻のもの史學史として更にその價値は増したことであらう。

從來吾國に於ては名著解題式のもの二三あらはれたが、本書の如き全般的係列をもつたものはこれが最初であつて、單にその意味からでも大に本書の出現は歓迎せらるべきであらう。歴史とは如何なるものでなければならなかつたか、如何なる方法により取扱れて來たかを知る上に於て何人も先づ一般史學史に通じ、更に各自專攻する所のものの史學史に明であらねばならぬ。この意

味に於て價値ある本書の出版せられたことを喜ぶと同時に、遺稿編纂當事者諸氏の努力を深謝する次第である(山下昌孝)。

Japan, A Short Cultural History, by
G. B. Sanson, London, 1931.

手頃な一冊子に日本の文化史を原始時代から最近世まで一括して述べ去ることは、何人も期待して居ることであるがさてその實現は生易しい仕事ではない。我國人の著作の中にもこういふ條件にびつたり適合するものは極めて稀である。然るに英人であり、大使館にあつて繁務に従事する我サンソン氏は、此難事業を首尾よく完成することが出來た。吾人は氏の孜々として倦まざる努力、その明敏な史才に讃嘆を禁じ得ない。五百三十七頁の著書の中に、上は古代より、奈良、平安、鎌倉、室町、戰國を経て江戸に至る各時代を制度、宗教、藝術、文學、學藝の各方面から精彩に描寫し、然も政治的の推移の略述も忘るることなく主として歴史的展開の導因を經濟的變遷に求め系統ある日本文化史を編述して居る。本書は、たゞに外人に對し便利なる日本文化の研究の手引きを提供するのみならず、我國人にとつても又一讀に價する良著である。先に日本語の歴史的文法なる大著を公刊した著者のこととして日本語に對する造詣極めて深く所在古文書などを例證に引いて讀者の印象を深くせんとする手腕は、敬服の至りである。日本に對する同情理解は、全篇を通じて溢れ、殺伐な封建法、殘酷な宗教迫害を説いても之を當時の歐洲の優るとも劣らざる諸例を讀者に想起せしめ、日本人の心性を誤解せしめざらんことに勉め

て居る。足利時代の禪的文化に最高度の文化の顯現を認め、戦國時代の決して闇黒時代に非ず、却つて諸人文の發達を見たることを指摘せるが如き、著者の史眼の非凡さを示して居る。著者は、序文に述べた様にマードックの如き從來の外人作家の膨大な日本史よりも直接日本人の著した著書史料について本書を編して居る。此點に本書の後世に傳はるべき價値が存すると云へやう。然しながらもし評者をして忌憚なく云はしむれば、此點にまた本書の弱點も存すると云へる。即ち著者の利用した本邦人の著書そのものに存した誤りがその儘本書の中に入られた嫌ひなきに非ざることである。たとへば十二頁に支那史書に現はれた日本を述べて、*The first authentic reference to Japan is probably a passage in the Shunhai King which states that the north and south Wa were subject to the Kingdom of Yen.*と述べて居るのは、松下見林の異稱日本傳以來の誤つた訓點に誘導せられた讀方で、今日、此山海經の一文は「蓋國在鉅燕南倭北、倭屬燕」と讀んで居り、南倭北倭屬燕と云ふ讀方は全然間違ひと認められて居る。更に十八頁に後漢書を魏志よりも古い史書の様に見えるられて居るのも誤りであり、十九頁に、倭人が鯨を身體に文身して居ると云ふ文も、魏志には存しない。また五十三頁に日本の祖先崇拝が全く支那輸入に過ぎずと斷じ、古代日本人の神は自然神なりと云ひ、上代日本に於ける生殖器崇拜の重要性を説きたる如き、たま／＼生殖器崇拜に關する邦人の英文論文などが著者に知られたるが故に生れた記事と考へられ、著者が、最近の日本民俗學關係の邦文論文に今少し通曉せられてゐたならば、かくの如き

書 評

見解には到達せられなかつたと残念に感ぜられる。祖先崇拝の定義に就て著者と見解を異にするやもはかられないが、自分は、古代日本人の強烈なる祖先崇拝の意識が氏族制度を結成せしめたるものと信じ、その祖先崇拝をもつて支那輸入とは考へない。支那と日本とは氏族制度が根底より相違して居るし、支那文化の大量的日本移入は、日本氏族制の完成以後である。トイテミズムの痕跡ある日本祖先崇拝のより原始的な體制に就ても西田博士などの研究を見ていたゞきたい。然し要するにかくの如き諸意見の相違も著者の準據せられた日本の參考書其物の性質より生じた差違と考へられ、著者が將來更に一層正確最新なる邦人の諸研究を参照せられて、本書をより完全な文化史に大成せられんことを衷心より希望する。上述した箇所は上古史に關する部分であり、人により異論の多い所である。その他の時代に關しては評者は全く門外漢であり、却てサンソム氏の教示により啓發せられる所頗る多大であつた。終りにのぞんで近來稀なる此好著を提呈せられた著者の努力に謹んで謝意を表し、その倍舊の健康を祈つて筆を置く。

(松本信廣)

Shmakov, I. N: *Obzor rabot i bibliografiches
kii ukazatel literatury o Russkikh Lopariakh.*
(Izvestiia Gosud. Geographicheskogo Obste-
hestva, 1930, Tom 62, No. 4, pp. 397—412.)

シニマコフ・イ・エヌ「ロシヤ・ラップ族に關する研究及び文
獻一覽」(ロシヤ地理學協會報告書第六二卷第四號)。